



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.123

2013.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

34

「何処でもと言ったら木曾義仲の里日義小中学校に(S36〜40・1961〜65)」

売木も5年たったので校長に何処でも良いから転任をと話したら、木曾の日義小中学校に決まった。平谷峠・治部坂峠・寒原峠・清内路峠を越えて木曾に入る。木曾川に沿って遡ること1時間、漸く旧中山道宮越宿の日義村に着く。はじめ空の狭い木曾谷に憂鬱だった。だが中央線が走り宮越駅があったのが嬉しかった。当時は蒸気機関車が走っていて松本に出かけて、樋口昇一さんを訪ね泊り込んで考古学について存分に話たり、本屋に寄れるのが楽しみだった。

宿直室床の間に縄文中期勝坂式土器片が木箱に入って積まれていた。数年前に上の原遺跡を発掘したが文化財保護法違反でやむやみに終わったという。住居址があったというが記録は無い。夢中になって接合したら完形土器が幾つも出来た。下伊那では中々手にすることのない勝坂式土器。木曾教育会総会で木曾にはじめてきた教師で発表をと言われ、上の原遺跡出土の縄文中期の見事な土器を見て作り上げた縄文人の生活と感性の豊かさをと『縄文中期土器から』を発表した。

クラブ活動に郷土班をつくった。男子生徒の何人かは考古学が好きで家近くの畑から遺物を採集してきた。私の関心が生徒に移ったのか嬉しい遺物もたらされた。小沢原遺跡からは弥生前期遠賀川式土器片が、これは最高に嬉しかった。『考古学手帖』に報告した。稻荷沢遺跡からは押型文土器立野式土器片が、下伊那だけでなく木曾にも分布することを知った。二本木遺跡からは平出3類A式土器が、早速発掘すると中期初頭住居址と立野式土器が纏まって出土した。平出3類Aについては木曾の資料を纏めて発表した。二本木遺跡の押型文土器に

ついては長野県考古学会で報告した。学校北側の道路に水道工事の溝が掘られ、そこから縄文中期唐草文土器が出たと持ってきた。見に行くと断面に幾つもの竪穴住居址落ち込みがあった。土器の出た一軒を発掘する。これがお玉の森遺跡に関わる最初でした。校舎北に校庭を造成することになり幾つかトレンチを入れて平安時代住居址を確認し発掘する。放課後郷土班の中学生や社会科授業実習だといって生徒と共に調査し、時には自習させて私一人でと苦勞するが、平安時代の住居址群で広い校庭を全掘出来ず残念だった。木曾駒高原にゴルフ場が作られることになって分布調査をする。多くの遺跡を確認するが、まだ原因者負担のルールが出来ていない時なので部分的にピットを入れるだけで終わったのが残念であった。同様なことは国道19号のバイパスが山麓の遺跡地帯を通ることになったが全く調査することなく工事が始まった。20を越える遺跡が無残に破壊されてしまった。

夏休みに開田高原の柳又遺跡の発掘に参加した。樋口さんは大学時代からの友人。夜枕を並べて語り明かした。初対面は森嶋稔さんとデブ同士と意気投合し、亡くなるまでずっと親しく交流した。青沼博之君は木曾西校出身で気さくな人柄で私の家にも気楽に出入りする仲となった。他にも木曾教育会郷土館委員の先生や木曾西校地歴部の生徒も親しくなり、木曾での仲間ができ共に幾つもの遺跡を調査するようになった。

下伊那から声が掛かり飯田市座光寺原遺跡では弥生後期の住居址を調査し、出土土器から座光寺原式を設定した。高森町増野新切遺跡は縄文中期後半の住居址で土偶の出土が目目された。9年後に再発掘し大きな成果を得た。上伊那からは藤沢宗平先生に誘われて箕輪村萱野高原の萱野遺跡の調査に参加し、縄文早期押型文土器細久保式の好資料に当たった。県教育委員会主体の開発地域埋蔵文化財分布調査では松本諏訪地区新産地区内調査で塩尻市高出IV地区を担当した。縄文早期押型文土器樋沢式土器の石組炉と土器石器の好資料を得て、私の押型文土器への研究意欲を高まらせた。



▲中学生とお玉の森遺跡発掘



▲小馬背遺跡で青沼君と(右)

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

目次

■田舎考古学人回想誌	何処でもと言ったら木曾義仲の里日義小中学校に	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第116回)	小林康男 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第13回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「人と動物の人類学」	阿部友寿 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第13回)

石井 則孝

《わが友・わが趣味 ―その2―》

はじめに

今回は、早稲田大学の考古学関係者、日本考古学協会の関係者、奈文研での仲間さらに現在良く会っている若い考古学関係者について書かせてもらったが、今回は、10年前に立ち上げた日本遺跡学会の面々と大学院時代の芸術学の同窓について記してみたい。

1. 日本遺跡学会の立ち上げ

日本遺跡学会は、2003年2月に設立した。この話のもととは、遺跡は考古学の専門家によって発掘され、その成果についても発掘者によって発表されるのが通例である。ところが、掘った遺跡が歴史上重要な遺構でありかつ後世に残し伝える必要性のあるものについては、単に埋め戻して保存するというのではなく、近年は、保存と活用の面から、掘った当事者よりも、それを活用する人々の方に重点が置かれ、掘った当事者に関係なく、史跡になったり公園になったり、時代の要請によって保存活用方法に大きな変化が生じてきている。「掘った人間に関係なく、遺跡の顕彰も出来ない」こんな話が坪井清足大親分から私のところまで伝わって来、「遺跡をもつと顕彰せねばならない必要がある」との観点から、昭和39年(2002)に入所した高島忠平、町田 章、松下正司、佐藤興治、猪熊兼勝などが集まり、「遺跡顕彰学会」を作ったと話がまとまった。そこで坪井さんは、「顕彰するほど我々は、個々の遺跡について知っているのか、遺跡の研究がほんとうに進んでいるのか等々の大きな問題があり、顕彰することは大事だが、遺跡そのものをもっと研究することが一番重要」であることに結論を得て、「遺跡学会」という名称に落ち着いた。

そこで遺跡が保存されたあと、その整備や活用方法について、最っとも見識のある奈文研の文化遺産部 景観研究室にしばらくの間事務局を置いてもらうことになった。そこで初代会長に牛川喜幸さんに就任してもらい、私は2代目の会長として、初期段階の足固めを行ってきた。現在は、奈文研前所長であった田辺征夫さんが務めている。

2. 日本遺跡学会の運営委員

坪井清足先生を顧問に据え、全国規模で研究を展開していく必要性から、運営委員には北海道から九州まで、全国規模で人材を求めている。北海道から畑 宏明さん、東北から進藤秋輝・田中哲雄さん、関東から沢田正昭・菊池誠一・西田健彦さんと私、関西から高瀬要一・岡村勝行・田辺征夫・増淵 徹・真鍋建男・和田晴吾さん、山陰から黒崎 直・吉岡泰英さん、九州から磯村幸男・高島忠平さんである。会計監査に、富成哲也・山口 博さん、幹事に奈文研から栗野 隆・内田和伸・恵谷浩子・加藤真二・平澤 毅・小野健吉諸兄になっていただき大変お世話になっている、選挙管理委員に京都の杉原和雄さん、文化庁の中島晴さんが担当している。このメンバーで併任の方もいるが、研究誌・大会誌の発行を行い毎年6月末に全体の運営委員会を開催している。昨年(2012)は、学会創立して10年目の節目の年になっていたもので、11月24～25日にわたって、設立の地奈良を

記念し「大和の世界遺産と遺跡」をテーマとして、平城京跡資料館講堂において総・大会を開催した。

3. 大会の内容

特別講演として、国土館大学の岡田保良氏による「世界遺産と遺跡」と題して、世界遺産条約の枠組みや、登録のプロセス、日本の世界遺産、今後の登録に向けての取り組みなど、世界遺産からみた日本の遺跡について論じていただいた。さらに薬師寺の山田法胤氏による「世界文化遺産である薬師寺について」の題のもと、伽藍全体の取り組みについて論じていただいた。

報告では、奈良県地域振興部文化・教育課の森本 理氏による「奈良県の世界文化遺産全体について」の概略と課題を示していただいた。次に法隆寺の大野玄妙氏に「日本で最初に世界文化遺産に登録された法隆寺における登録の経緯と保護の歴史・現在の取り組み」についてを論じていただいた。続いて奈良市文化財課の山口 勇氏から、1998年に登録された「古都奈良の文化財」について、周辺環境を含めた保全活動と整備・活用事業についての報告をいただいた。続いて大峯山竹林院の福井良盟氏から、2004年に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」について、経緯と登録に至るまでの活動・問題点及び登録の効果などを論じていただいた。最後に森本氏と同課の山田隆文氏に、現在登録に向けて取り組んでいる「飛鳥・藤原の宮都とその関連資料群」についての報告があった。

これらの報告については、「遺跡学研究」第10号 2013年発行に詳細に記録してあるので関係者は是非読んでいただきたい。

以上記してきたように、日本遺跡学会は、日本列島全体に常に目を向けて研究活動を行っているので、運営委員の仲間とは、北海道や九州でも行動することが多く、本年は、10月4日(土)・5日(日)に函館で大会を開いた。130名を超える市民参加もあり、2日目には、バス3台を連ねて、青森県と函館市が手を組んで行っている世界文化遺産登録へ向けての「北海道・北東北の縄文遺跡群」の北海道に所在する遺跡群の見学会を行った。函館市教委の阿部千春さんはじめ多くの研究者・関係者にお世話になった。

4. 早稲田大学大学院芸術学専攻学科

前にも記したように、早稲田に考古学専攻の大学院は無く、私は唐招提寺鑑真大和上の研究者の第一人者として知られる安藤更生先生の下に入院した。大学一年生の時から指導を受けていたので、

何とか入院を許されたのだろうと推測している。先輩として佐藤・坂井の二人が入院を許されていたが、あくまでも私の推測であるが、滝口 宏先生と安藤先生が會津

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

八一先生の門下生であるところから、約束ごととして、一人なら入院を許そうという話になっていたものと考えている。それは、その後も、考古学の専攻生を毎年一人ずつ入院が許されてきた歴史がある。芸術学専攻には、絵かき、写真屋、

ガラス屋、俳優、東洋美術史、西洋美術史、日本美術史と各方面の才覚ある面々が居た。毎週木曜日が會津記念館にある研究室が全員集合の研究日であった。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 116

平出遺跡 ～ 長野県塩尻市～

小林 康男

本欄への執筆依頼を受けた時、いくつかの遺跡が頭にうかんだが、やはり「平出遺跡」を紹介することにした。平出遺跡とのつきあいはもう半世紀を越えている。小学生の頃からしばしば平出遺跡を訪れ、畑の中にある復元住居や平出の泉の近くに建つ平出遺跡考古博物館の展示物を飽くことなく見入ったことを思い出す。その後、縁あって平出博物館に勤務することになり、平出遺跡の保護や整備、博物館の活動に携わり、現在もその仕事を続けている。

平出遺跡は、長野県塩尻市にあり、JR塩尻駅からおよそ1kmの至近の場所にありながらも周囲はブドウ園が取り巻き、秋ともなればその甘い香りに満たされる、そんな場所に遺跡はある。1793年(天明3)、ここで石鏃を拾い記録に残したのは菅江真澄、もう230年も前のこと。それからるか後の1932年(昭和7)に部分的に発掘調査が行われているが、「古代集落遺跡の総合調査」をテーマとして本格的に発掘調査の手がはいるのは戦後まもない1950年(昭和25)になってからである。

大場磐雄を中心とした調査団は、地域の人々の協力を得ながらこの遺跡が平出の泉から流れ出た渋川に沿って東西1km、南北300mにわたる広大な範囲に広がる縄文から平安時代にかけての大集落遺跡であることを明らかにした。この調査は、考古学ばかりでなく建築・古生物・地学・民俗・歴史など多分野の研究者が平出遺跡・平出地区を総合的に研究しようとした総合学術調査で、その後の考古学的調査方法の指標ともなったと評価されている。1951年(昭和26)には史跡指定地の一角に藤島亥治郎の手によって第3号住居が古代の農民の竪穴住居としては全国で初めて復元され、その姿は「伏藎の曲藎の内に 直土に藁解き敷きて」と山上憶良が詠う貧窮問答歌の世界を髣髴させるものとして話題となった。

こうして1952年(昭和27)にはおよそ15haが国史跡となった。

史跡指定から40年、この広大な史跡指定地の保護・活用



縄文の村

のための事業が1997年(平成9)からようやく動きはじめた。土地を買上げ、平出遺跡公園として整備する事業のテーマは「五千年におよぶ平出の地」。史跡指定地の中央区域のおよそ6haを整備対象とし、整備委員会(委員長戸沢充則)の指導を得つつ、「縄文の村」「古代の農村(古墳・平安時代地区)」の景観復元をおこない、縄文時代から現代までの時間の流れを実感できる場の創出を目指すことになった。

整備に先立って実施された発掘調査では、およそ1haが調査対象となり、昭和20年代からの調査面積を加えると史跡指定地の13%が発掘されたことになる。既掘の成果も含めると発見された竪穴住居跡は、縄文中期116、後期2、古墳81、平安51、古墳から平安33の283軒、古墳・平安の掘立柱建物址は7棟に達している。今回の調査では、今までまったく予想もしていなかった縄文時代中期の双環状集落の存在という新知見をもたらし、古墳時代では大型竪穴住居と掘立柱建物を含む遺構群が遺跡の東西に分布することを明らかにし、なぜか火災に遭った住居が異常に多いことにも関心が寄せられた。平安時代では従来から言われていた全期間継続していたとの考えかたに修正を迫る10世紀後半から約100年間の短期間だけ集落が営まれたことを明らかにした。

整備では、この発掘調査の結果を基にして縄文・古墳・平安の各時代の集落復元が進められた。「縄文の村」では、中期新道期の集落を7棟の竪穴住居・2基の立石・広場によって表現し、その隣接地には廃棄竪穴住居への縄文土器大量投棄の状態をレプリカ展示している。「古代の農村」は、6世紀から7世紀の古墳時代と11世紀前半の平安時代を整備対象とし、時代の異なった古代の農村の姿を見ることが出来る。古墳時代では有力者の住まいを大型竪穴住居と高床倉庫で、一般農民の住まいを中型の竪穴住居を復元することで示し、周囲にはオハツモモの果樹園・畑地を配している。平安時代では、4棟の



古代の農村 古墳時代地区

竪穴住居と1棟の納屋が「ニワ」と称される広場を囲むように復元され、当時の「一戸」の集落景観を再現している。

遺跡公園脇に建てられたガイダンス棟の2階にあがると、背後に横たわる比叡ノ山・大洞山を借景とし、また周囲をブドウ園や畑地を取り巻くすばらしい自然環境のなかで、木々や草々の緑に染まる縄文・古墳・平安の各時代の佇まいが一望できる。

背後の山々、畑地、そして復元された家々に目をとめれば当時の人々の暮らしぶりをおぼろげながら想い描くことができる。縄文人や古代の人々が見たと同じ風景を現在の私たちもそのままながめることができる、これが平出遺跡の何よりのすばらしさである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小松 学さんです。

考古学者の書棚

「シリーズ来たるべき人類学⑤ 人と動物の人類学」

奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋 編／春風社(2012) ————— 阿部 友寿

目次

第Ⅰ部 行為主体性

1. 動物と話す人々(山口未花子)
2. 告げ口をするブタオザル — ボルネオ島プナンにおける動物アニミズム(奥野克巳)

第Ⅱ部 分離不可能性

3. 西欧におけるハイブリッドとしての怪物 — 人間と動物を構成要素とするその身体と役割をめぐって(松平俊久)
4. 「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」 — アフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の交錯と混淆(大石高典)
5. 生きているマンダラ — ヴァジュラ・ヨーギニーとサンクの生態宇宙論(石倉敏明)

第Ⅲ部 境界性

6. 隠岐島のばけ蛇 — または森羅万象に口を割らせること(近藤祉秋)
7. 野生動物とのつきあい方 — 生物多様性保全におけるツキノワグマとジュゴンの位相(池田光穂)

第Ⅳ部 越境性

8. 共存を可能にする(境界)の再生産 — マサイ社会におけるライオン狩猟とゾウの追い払い(目黒紀夫)
9. 隔離された越境性の再検討 — エチオピアの獣害対策におけるローカルな境界認識を手がかりにして(西崎伸子)
10. 動物にひそむ贈与 — 人と動物の社会性と狩猟の存在論(ポール・ナダスディ)

本書のキーワードは、動物と人との二元論もしくは動物対人の二項対立、その境界性である。我われは、あたりまえのこととして、人と動物とを分離させ、対立するものと考えてはいないだろうか。そして、動物と人との二元論もしくは二項対立を日本列島にかつて存在した狩猟採集民にもあてはめてはいないだろうか。たとえば、縄文時代の人びとも、人と獲物は対立した存在であったと。しかし、本書を見るかぎり、人と動物の分離や対立はどの社会にも共通する普遍的な特徴ではない。動物と人は、その特徴を共有し、ときに入れかわり、さまざまな場面で動物と人の境界が曖昧になることがある。

本書のすべてを紹介することはできないので、私の関心にそってその一部を上げる。

「動物と話す人々」のなかで、山口未花子は、カナダの狩猟採集民カスカが動物を人と同じように会話すると見ているという。動物は人と会話することも可能で、その動物との交

渉成立が狩猟の成功に結びつく。彼らにとって動物との交渉は、現実には直面する死活問題であってけっして空想の絵空事ではない。

「告げ口をするブタオザル」では、奥野克巳が、ボルネオ島狩猟採集民プナン社会における、人の粗野な振る舞いについてカミに告げ口する動物をあげる。プナンがそのように動物を思い描く。このとき、実際にカミに告げ口するのかどうかを問うても始まらない。なぜなら、動物を人のようにあつかうことが擬人法だとか比喩表現だとかいう説明にとどまらざるをえないからだ。彼らは単に動物を人に喩えているわけではない。その変換の裏に彼らにとっての動物と人との距離感を読みとらねばならない。

「第Ⅱ部 分離不可能性」では、動物と人が入れかわり人と動物が分離されない事例が紹介される。たとえば、『「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」の民族誌』で、大石高典は、中部アフリカの狩猟採集民バカと農耕民バクウィレをあげる。彼らは、お互いに相手の人々をゴリラや小動物である「ゴリラ人間」と考え、ゴリラの中にも魂は人間という「人間ゴリラ」がいるとも考える。このなかで、狩猟採集民であるバカは、農耕民バクウィレに比べ、動物と人という二項対立や二元論を避ける傾向があるとの興味深い指摘がなされる。

人間と動物の二元論や二項対立的思考は、欧米の人びとにとって抜け出し難い思考のようである。「動物にひそむ贈与」のなかでポール・ナダスディは告白する。「互酬性は社会的行為であるため、人間同士、つまり、交換過程に活動的かつ意識的に参加する社会的存在の間でのみ起こりえる」と欧米の研究者は考える。そのため「欧米の人類学者は一人と動物の関係に関する先住民の考えかたに明るい者たちでさえも—動物、ましてや、感覚をもった霊的に強力な動物も含むように社会という分析概念を拡張することにためらいがちであった」というのである(p308)。

人と動物の対立的思考に対する疑問、広義の人にとっての二項対立的思考を対象化するには、ヒュー・プロディ(池 央歌訳) 2004『エデンの彼方—狩猟採集民・農耕民・人類の歴史』草思社もあわせて参照いただきたい。

アルカ通信 No.123

発行日 2013年12月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp